

〔書評と紹介〕

『新青森市史 通史編第一巻 原始・古代・中世』

宇部 則保

本書は、「新青森市史」通史編全四巻のうち、旧石器時代から中世までを対象とした一巻で、平成二十三年三月に刊行された。最近の考古学の調査・研究成果がふんだんに取り入れられ、資料がない時代については、周辺地域の関連資料で適宜補われ、通史としての体裁がくずれないように構成に工夫が凝らされている。全体に多くの写真、図を入れることで、文字による記録の乏しい時代の叙述が理解しやすいよう配慮されているが、巻頭の遺跡カラー写真がやや小さくなってしまった点が惜しまれる。

本書全体は三部構成で、「第Ⅰ部 原始時代のおもり」は旧石器時代から弥生時代、「第Ⅱ部 古代の外浜世界」は古墳時代から平安時代、「第Ⅲ部 躍動する中世の外浜」は鎌倉時代～室町時代について記述している。

第Ⅰ部	原始時代のおもり
第一章	旧石器時代のおもり 第一節 旧石器時代の環境 第二節 旧石器文化の変遷 コラム1 旧石器文化研究とおもり
第二章	縄文時代のおもり 第一節 尖底土器の時代 第二節 円筒

土器の時代 第三節 十腰内式土器の時代 コラム2 環状列石の石運搬 第四節 亀ヶ岡式土器の時代
第三章 弥生時代のおもり 第一節 水田稲作の開始 第二節 竪穴住居と墓地跡 第三節 北海道との交流 第四節 青森市の弥生遺跡
第Ⅱ部 古代の外浜世界
第一章 空白のエミシ時代 第一節 古墳文化の北上 第二節 続縄文世界の広がり 第三節 エミシとは 第四節 阿倍比羅夫「北(東)征」の時代 コラム3 外浜の比羅夫伝承
第二章 大開発時代のおもり 第一節 集落の拡大 第二節 生業の展開 第三節 元慶の乱と津軽 第四節 南北交流の様相 第五節 防御性(区画)集落の時代
第三章 古代のモノ・ココロ・動き 第一節 墨書・刻書土器の拡大 第二節 北の宗教遺物 第三節 島と日本海文化
第Ⅲ部 躍動する中世の外浜
第一章 平泉・鎌倉世界の北上と在地勢力の拡大 第一節 奥州藤原氏の成立と滅亡 第二節 「奥大道」とかわらけの道 第三節 鎌倉時代の津軽・外浜 第四節 鎌倉期津軽安藤氏の自己認識とその基盤 第五節 蝦夷管領安藤氏と津軽大乱(安藤氏の乱) 第六節 中世の石江遺跡群
第二章 南北朝から室町時代へ 第一節 津軽の南北朝動乱 第二節 日の本將軍安藤氏と、その滅亡への道 第三節 青森市域における中世の遺跡と出土遺物 コラム4 尻八館の青磁浮牡丹文

香炉 コラム5 外浜の安藤氏伝承

第三章 乱世の外浜 第一節 堤弾正と堤・横内 第二節 浪岡御所と

外浜 第三節 油川湊・油川城と外浜 第四節 埋蔵銭と外浜

第五節 浪岡北畠氏の滅亡と大浦為信による津軽独立 第六節

大名領主権の確立と外浜支配 第七節 外浜の宗教世界

以上の項目をみてもわかるように、章・節の流れは通史の一般的な形をとっているものの、各部の表題には、現在の「青森市」の範囲に限定されないより広い視野に立った歴史叙述、という編集方針が反映されている。そこには列島史のなかでの青森地域の歴史的な個性を示したいという編者・執筆者の意図があるのだろう。各部には、関連項目について肩の凝らないコラムが添えられており、通史を身近に感じさせている。

さて、評者の研究テーマはもっぱら古代であり、「第Ⅱ部 古代の外浜世界」を興味深く読んだ。ここではそのなかで注目した点、感じたところについて述べ、責を果たしたい。

古代外浜は北日本の他地域と同様、中央からエミシの地と呼ばれつづけた所であり、後々まで律令体制に組み入れられることはなかった。第Ⅱ部には、小口雅史・木村淳一・齊藤 淳・小嶋芳孝の諸氏の手で非律令の世界の一部をなす外浜の古代の変遷とそこに見出される歴史的特色が記されている。

第一章の「空白のエミシ時代」は、エミシの活動痕跡が不明な四〜七世紀が対象である。日本史上は幾内を中心とした前方後円墳の時代であるが、四〜六世紀の青森市域では、豪族の古墳はもちろんのこと、集落、

墓などの具体的な痕跡もみつからない。続縄文文化の後北式土器とそれに続く北大式土器、古墳文化の土器である南小泉式の土師器が出土しており、東北北部の他地域の状況と同様、続縄文文化が基本となる社会のなかに、南から古墳文化が断片的に入り込んでいく状況がうかがえる。七世紀は、文献史料から律令国家とエミシ社会との具体的な対峙の様子がみえてくる時期である。阿倍比羅夫が船団を連ねて津軽、渡嶋を指した有名な斉明期の日本書紀の記事は、北方史にふれるとき欠かせない史料であり、本書ではこの時代を、第四節「阿倍比羅夫（北（東）征）の時代」として扱っている。このなかでは津軽蝦夷の朝貢や、また彼らの指導者が郡領に任命されることなどを通して、東北北部のエミシのなかでも津軽蝦夷はいち早く中央から認識されていたことについて記している。

このように文献史料では北の要衝地として登場する津軽ではあるが同時代の遺跡、遺構は最近においてもみつからないのである。こうした文献史料と考古のあり方とのギャップは従前から考古、文献両方の研究者が話題、問題としてきた点である。本書では遺跡の姿が見えない状況を当時の生業、生活様式の特徴ととらえ、短期間で移動を繰り返す遊動生活が展開されていたと結論付けている。古代的外浜世界の成立期がどのような形で展開しているか、いましばらく資料の蓄積を待つことになろう。

第二章「大開発時代のおもりの」は、平安時代の人の流動化が進む外浜世界と周辺の津軽一円の状況が記述されており、地域の開発という面

に多くの頁が割かれている。これらの地域で最も資料が増えている時期は、九世紀後半から一〇世紀前半にかけてのものである。集落、堅穴住居が爆発的に増え、多様な集団が存在していたと推測されている。さらには秋田城を舞台とした元慶の乱（八七八）前後に出羽方面から押し寄せた移民も加わり、大幅に人口が増加していったとみなされる。田舎館村前川遺跡で調査された平安時代の水田は、こうした人口増に対応したものである。さらに五所川原窯の須恵器生産、岩山山麓、西浜地域の鉄生産をはじめ、木器生産、土器製塩など手工業生産の拡大も進む。にわかには状況を呈するこのような社会の到来は、まさに大開発時代という表現が適当である。

第四節「南北交流の様相」では、律令文化と擦文文化が融合した地域の様相を多くの出土品から記述している。それらは律令側との多様なレベルで行われた交易活動で持ち込まれたものである。そこには「もの」だけではなく新来技術の供与や技術指導など情報の受け入れに伴う律令側と地元との様々な係わり合いがあったであろう。

北との交流では、外浜世界の擦文土器の増加によって北海道との具体的な交流経路が示されている。とりわけ新田1遺跡などの擦文土器の出土は、北海道との緊密な関係を物語る。擦文土器急増の背景について斉藤氏は、律令体制の弛緩に伴う北奥の政治再編と交易あるいは渡航・越境の自由化など自由経済の進展があったからと述べる。ここで気になるのが「渡嶋」との関係である。渡嶋は一般には北海道を指すことが多いが、編者の小口氏は津軽半島海辺部・北部もその範囲に含め、津軽海峡を挟んだ南北の領域として理解する。津軽半島海辺部が後々まで「〇〇

浜」とよばれ「郡」名が付かない特殊な地域ということが主な理由である。評者がにわかには言及できる部分ではないが、集落のあり方からみると半島部と津軽平野部とで様相の違いがあることは確かである。特に、浅瀬石川流域以南と、青森市域などの以北とは古代集落の成立時期に相違が認められており、また以北と以南の同時期の集落との比較では出土する擦文土器の数量にも格差がみられる。陸奥湾沿岸西部の遺跡では擦文土器の出土密度が高く、渡嶋世界（擦文世界）の要素がかなり濃厚な地域であり、本場の渡嶋世界からもちこまれる鷺羽、毛皮類など交易の中継地となっていた可能性も十分考えられるのである。

第五節「防御性（区画）集落の時代」では、一〇世紀中頃～一一世紀に盛行する防御性（区画）集落を軸に、律令支配の終焉、北との交流頻度の増加による経済活動の活発化、在地豪族の利権争い、中央との軋轢などが顕在化する平安時代後半の外浜世界を解説する。防御性（区画）集落の代表格が青森市域の高屋敷館遺跡であり、この種の集落としては唯一の国史跡である。この項では、防御性集落の発生、研究史、分布・類型、発生・終末年代、名称問題、防御性集落論と戦争、軋轢の背景としての交易、軋轢の高まり、防御性集落成立に関わる社会変化、低地の拠点集落としての新田1遺跡、防御性集落の消滅などの記述が行われている。名称問題、性格論はとりあえず置いておくとしても、年代観、特に終末年代については研究者間で一致がみられているわけではない。そういう意味で、高屋敷館遺跡の年代観は重要であり、この遺跡についてもう少し踏み込んだ記述が欲しかったと思う。ただ、そうはいっても他の自治体史と比べて防御性（区画）集落が抱える多岐にわたる論点が述

べられており、この種の集落の研究動向を知るには大変便利である。近年、丘陵などに営まれる防御性集落とは異なり、低湿地に立地する五所川原市十三森遺跡などの集落調査も進んできている。新田1遺跡もこれに含められるかもしれない。将来的にはこうした集落も含めた「防御性（区画）集落の時代」の評価があらためて必要になってくるのではないだろうか。

第三章 「古代のモノ・ココロ・動き」は、通史というよりはそれぞれ独立させた特論の意味合いが強いものである。辺境に生きるエミシのココロを支え、強く動かし、集団の結束をうながすなど様々な場面の動機づけに使われた道具を紹介し、南との同質性、異質性について記述されている。

第一節「墨書・刻書土器の拡大」は外浜世界のあらたな祭祀として位置づけられる道具の登場を意味するものである。特に墨書土器は列島全体に普及する共通の背景のなかで各地域に受容されているものであるが、終焉時期については八戸などと津軽地域とは差があることも述べられている。野木遺跡の「夷」の異体字とされた「夫」の刻書は、「奉」の略字形といわれている。土師器の刻書のなかには擦文土器に記されるものと共通するものもあり、ここでも北との関係が注意されている。五所川原窯の須恵器にも擦文土器の文様と同じ刻書をもつものがあり、窯経営の主体者に擦文人が関わっていた可能性も無視できないのである。

第二節「北の宗教遺物」については、石江遺跡群のひとつ新田1遺跡の発掘成果が大きな注目を浴びた。物忌札、斎串、刀形、馬形、鏝形の

木製品、土馬、仏像光背など律令的な祭祀遺物がこれほど多量に県内の遺跡から出土したのは初めてのことである。その一方で、近年東北北部各地で増えている錫杖鉄製品もあり、これは両手にもって振る、あるいはシャーマンの衣装に付けて鳴らす発音具であるなど諸説があるが、いずれにしろ北奥の特徴的な宗教具と考えられている。木村氏はこうした多種の宗教遺物が使われる古代の外浜世界は、仏教的、陰陽道的、神道的な要素が並存する神仏習合の状況であったと推察している。

第三節「島と日本海文化」本書で目にすることの多いフリーズのひとつが、「交易・交流」であり、ここでは小嶋氏が、島を中継地とする日本海交流について述べている。大陸までを視野に入れた交流によって外浜世界の風土が形成されたという壮大かつ魅力的な説である。続縄文土器が新潟県あたりまで南下し、古墳文化と接触する。一方、古墳文化の土師器、須恵器は礼文島まで達しており、続縄文文化やオホーツク文化と共存している。こうしたことなどからわかるように、阿倍比羅夫の遠征以前の古代には日本海路による頻繁な南北交流の前史があった。

さらに古くは、円筒土器文化の特別史跡三内丸山遺跡から出土した糸魚川産のヒスイ、北海道の黒曜石、秋田のアスファルトなどからも知られるように日本海交流は縄文時代からの日常的とも思える行為であったといえるのである。この項で感じたのは、交易・交流の存在はいつの時代でもそこが、外に開かれた世界ということを象徴するという点である。

以上、評者の目にとまったいくつかの点を紹介しつつ、若干の私見も加えて述べてみた。本書には編者の掲げる日本史、北方史のなかの青森市域を常に意識させた形で記述していく方針が貫かれている。南と北の

文化が接触する世界、いわば境界領域にあるエミシ社会の姿を外浜とい

うフィールドで描こうというねらいをもって編まれたものであり、各執筆者が述べられた内容からはそうした目的は十分に果たされている。

本書は、通史の流れに沿いつつ考古学の概説書としても十分な内容を備えており、青森市民のみならず多くの方々に一読を薦めたい書である。遺跡の多くは、先に刊行された『新青森市史』資料編1考古編でくわしく取り上げられている。その部分もあわせて活用いただくことで、本書の理解がいつそう増すものと思う。

かつての「青森市史」全十五巻には通史編などは盛り込まれなかった。昭和四十九年三月に刊行された最終巻のあとがきには、「市史編纂を終了するにあたり、心残りのことは青森市の古代編、考古編を編述しなかつたことである。」と記されている。今回、通史編の一巻として原始・中世の歴史が最新の資料をもとにまとめられたことは大変喜ばしい。

(A5判、七五八頁、二〇一一年三月、青森市史編集委員会、六九三〇円)

(うべ・のりやす 八戸市埋蔵文化財センター副参事)

『新編弘前市史 通史編 岩木地区』

山下須美礼

『新編弘前市史 通史編 岩木地区』は、平成十八年二月に弘前市・相馬村との合併により新たに弘前市の一部となった岩木地区、すなわち旧岩木町域の歴史を、時系列的に叙述した一冊である。当初は旧岩木町において『岩木町史』編さん事業として計画されたが、その後の編さん過程の歳月において平成の市町村合併のときを迎え、新たに『新編弘前市史』のシリーズの一つとして組み込まれることとなった。この巻に先立ち、平成二十二年三月には『新編弘前市史 資料編 岩木地区』が刊行されている。旧岩木町は、自治体としての実在は失ったが、本書の編さんにより、歴史を読み解く場として、永く記録されることとなった。本書に編まれた通史は、旧岩木町域という、昭和三十年から約五十年間存在した、自治体としての地域的範囲が、過去においてどのような歴史の一部を構成し、あるいは歴史の主体となってきたのかを物語るものである。自治体としての地域区分が消滅した今、人々がどのような暮らしを展開してきた世界なのかを振り返り、そこからどのような未来を展望すべきかということについて、この地域に思いを寄せる人たちが共通に思考する場を、本書は提供する意義を持つ。

さて本書は、次の七章で構成されている。

第一章 岩木の自然

第二章 原始・古代の岩木